

# ミシエル・ブレアル——古代と現代とをつないだ言語学者

工藤 進

比較文法学者ミシエル・ブレアル (Michel Bréal 一八三二—一九一五) の名は日本では、言語学者というより、近代オリンピックの祖といわれるクーベルタン男爵 (Pierre de Coubertin 1863—1937) にオリンピック競技として、マラソン (徒競争) を進言した古典語学者として知られている。自軍の勝利を伝えるため四二二—一九五キロ走って息絶えたギリシャ兵士の話はベルシヤ戦争中の有名なエピソードである。第一回オリンピックは一八九六年のアテネ。一九〇〇年の第二回がパリであった。

グラマー・スクールのラグビーを見て、ホメーロスにつながる古代のオリンピック祭を思ったクーベルタン男爵と、当時の教育の基本を古典の中に見いだしていたブレアルは、大掛かりな国際体育祭を協力して計画し、当時のきな臭いヨーロッパ

を融和することを夢見た。ブレアル『教育の旅』*Excursions pédagogiques* (一八八二年、パリ、アシェット社 Hachette) にはドイツの古典語教育の現状と並んで、体育教育の詳しい報告がある。古代オリンピックは、ホメーロス『イーリアス』第二十三歌で繰り上げられるパトロクロス追悼競技会にその原型を見ることができる。

アレクシ・ピエロン (Alexis Pierron 1814—1878) 校訂・注釈によるホメーロス校本 (アシェット社) は今だに大きな権威をもつが、この版は『イーリアス』、『オデュッセイア』とも1860年代に完成をみた。フランスではそれ以前に詩人ルコント・ドリール (一八一八—一八九四) によって仏訳されたホメーロスの二作品が名訳として現在でも版を重ねている。ルコント・ドリールの率いた詩人グループ「高踏派」*Parnassiens* と

いう名は、詩神 (mousai) とアポロンの山とされるギリシャの  
パルナッソス Parnassos に由来する。

明治学院大学言語文化研究所で一八九三年に始まった「ホ  
メーロス輪読会」は今年(二〇〇八年度)で二十六年目を終  
えようとしている。『イーリアス』はずでに終わり、現在『オ  
デュッセイア』の二十二歌に入った。最終巻二十四歌は来年  
二〇〇九年度、二十七年めで終了の予定である。この会で用い  
る版はさまざまあるが、主にピエロン版である。現在は毎週一  
回四十行以上進む。一歌終えるごとに、現在五人の参加者(学  
内外の参加者はこれまで延べ五十人を越えた——初級修了者の  
参加自由)のためにこの版をプリントして配るが、このプリン  
ト作業もあと二回で終わる。

ドイツ生まれのブレアルは、ロレーヌ地方の町メス Metz  
で中等教育を終え、パリの高等師範学校に入学。コレー  
ジュ・ド・フランスでサンスクリット学者ビュルヌフ (Eugène  
Burnouf 1801-1852) の教えをうけたのち、比較言語学の研  
鑽のためにベルリンの比較文法学者ポップ (Franz Bopp 1791-  
1867) のもとに赴いた。一八三三年からほぼ二十年掛けて刊行  
された比較言語学の聖書ともいわれる『印欧語比較文法』(五  
巻)は、フンボルト (Wilhelm von Humboldt 1767-1835) に  
よってベルリン大学に招聘されていたポップの手になるもの

だが、彼に師事したブレアルはこの著作を仏訳し、比較文法  
の方法論をフランスに導入した。クーベルタンは、このブレ  
アルがベルリンからパリに戻り、弱冠三十二歳でコレージュ・  
ド・フランスの教授になる前年、パリ近郊のシュヴルーズ  
(Chevrouse) に生まれた。シュヴルーズ渓谷はバスカルを含む  
ジャンセニストたちの拠点の一つ、ポール・ロワイヤル女子修  
道院があった所である。クーベルタンの生家はこの美しいカト  
リック的環境にいまも残る。

ブレアルは、バイエルン地方ランダウ (Landau) に生まれたフ  
ランス系ユダヤ人である。ブレアルの師ポップは一八一二年  
から十六年に掛けてパリに滞在し、そこでアラビア語、ペル  
シャ語、ヘブライ語、そしてとくにサンスクリット語(当時  
のドイツにはサンスクリット語のすぐれた教師がいなかった)  
を、シェジー (Antoine Léonard de Chézy 1773-1832) から学ん  
だ。ヨーロッパの大国である独仏両国は当時、古典学でも競い  
合っていたが、印欧語文法の巨人・ドイツ人ポップの基礎を固  
めたのはフランスのオリエンタリストたちであった。

十九世紀後半は、グリム兄弟や、ポップ、フランスのレヌ  
アール (François Raynouard 1761-1836) 政治家。晩年、南仏  
文学の復興を考えた) といった人たちをかつて動かしていたロ  
マン主義熱がすでに薄れていた時代だが、ブレアルの当初の情  
熱の対象は、神話の起源という、多分にロマン主義的匂いのす  
るものである。この分野に関する論文は『神話・言語学論文

集』*Mlanges de Mythologie et de Linguistique* (パリ、アシエット社、初版一八七七年)にまとめられている。比較文法のフランスへの紹介者であった彼は、この十九世紀に急速な発展を遂げた比較文法から次第に離れ、広い意味での言葉の心的分野に興味を移した。

ブレアルはさらに専門のかたわら公的立場において言語行政に携わることになる。ドイツとベルギーの主に中等教育についての前述の著書『教育の旅』は文部省の役人としてドイツ、ベルギーの旧制中学校を視察した際の報告である。それによるとドイツの古典語教育の方法はフランスの中等教育の方法(論文記述方式)よりは明らかに日本の方式(暗記短答式)に近く、明治以来の日本の教育はフランスよりはドイツの方法を取り入れていたことがわかる。また彼は同じ文部官僚の立場で、古典語教師をめざすパリ・ソルボンヌの学生に連続講演し、古典語教育者としての心構えを著書『古典語教育について』*De l'enseignement de langues classiques* (パリ、アシエット社一八九一年)にまとめた。

専門の比較文法学の分野で彼は一八六八年、現在に続く「パリ言語学会」を設立し、その事務局長(終身)となった。さらに同年、研究者の研修場所として現在に至る機関「パリ高等実践研究院 *Ecole Pratique des Hautes Etudes* 略称 EPHÉ」の設立に加わり教授となる。彼の主な論文発表の場は、「パリ言語学会」の機関誌「言語学会報」*Mémoire de la Société de Linguistique*

*de Paris* (現在は *Bulletin de la Société de Linguistique*) であったが、他に「ギリシャ古典学会年報」(*Annuaire de l'Association des Etudes Grecques*)、<sup>7</sup>「研究者日報」*Journal des Savants*、<sup>8</sup>「両世界評論」*Revue des Deux Mondes* といった、若いヴァレリーやブルーストといった文学者の読むものにも好んで寄稿した。言語学の時代と言われる十九世紀後半のフランスの人文系学問の、実際と立案(行政)双方の中心に彼は位置したが、目指した学問の方向は現代の記号論的分野につながるものではなく、古いユマニスト的方向であった。

彼は後半生、ドイツのシュライヘル (August Schleichler 1821-1868) の、言語を有機物的生体と見なす考え方、あるいは「青年文法学派」と呼ばれたドイツ比較言語学者たちの唱える「音声法則万能主義」の、いわばことばの物質的側面を強調する視点を忌避し、意味論という、ことばの内面的、心理的側面の考察に傾いていたが、これは、彼のことばへの情熱が十九世紀の前半の思潮に関係していたことを示すものであると思われる。

後半生の仕事の集大成とも言える『意味論試論』*Essai de Sémantique* の初版は一八九七年、彼の多くの著作を出したアシエット社から出版された。「意味論」*sémantique* (英語では *semantics*、北欧圏の一般用語は *semasiologie*) という新しい術語を学界に定着させたこの本に対し、ただちに反応したのは同僚の言語学者ではなく、若いヴァレリー (Paul Valéry 1871-1946

『メルキュール・ド・フランス』 *Mercure de France* XXV号(1898/1)である。ブレアルは比較文法・言語学の分野を超え、当時の文学的領域に踏み込んでいたのである。

私が用いているブレアルの *Essai de Sémiotique* のテキストは、一九二四年版のストラットキヌ・リプリント版 Sarkine Reprints (ジュネーヴ)だが、この版の冒頭には著者の亡き妻アンリエット Henriette への献辞が掲げられている。

ブルースト (Marcel Proust 1871-1922。ヴァレリーと同年)の母方の叔母の一人 Marguerite Mayer はブレアル夫人 (Henriette Bamberg) の姪にあたる。ブルーストの母は一九〇〇年、十九歳になった息子のマルセル (ブルースト) 宛の手紙で、このブレアル家のことを話題にしてゐる (Philip Kolb, p. 157 *Correspondance de Marcel Proust*, Tome 1, Ed. Plon 1970 Paris)。文学士になっても将来が定まらず画家を志望していた息子オーギュスト (Auguste Brial 1875-1938) を心配した父 (ブレアル) はブルーストの叔母 Marguerite に手紙を出しているのである。ブルースト家とブレアル家は縁戚関係にあると同時に、ブルーストにとってブレアルは、友人 (オーギュスト) の父という立場であった。

一八九二年、パリ大学に通っていたブルーストは、画家になったオーギュストに手紙を出している (pp. 471-472, op. cit. Tome 3, 1976)。そのなかに、『オデュッセイア』の魔女キル

ケーの場面 (第十歌) からインスピレーションを得た、ボードレルの「旅への誘い」の一節を引用している。

一九〇五年、英語 (ラスキン) 翻訳を手伝っていた家庭教師 Marie Nordlinger にあてた手紙のなかで、三十四歳のブルーストは、友人の音楽家レイナルド・アーン (Reynaldo Hahn) が地中海海岸での滞在で『イーリアス』の一場面を思ったことを記している (pp. 327-328 op. cit. Tome 5, 1979)。アーンはこの作品が「ホメーロス翁」個人の作になるのではなく、共同作業によるものらしいと言つて嘆く。これに対しブルーストは、マスネ (Jules Massenet 1842-1912) が現実の音楽家として現存するように、ホメーロスは実際に存在したこと、また『イーリアス』は構成され書かれたもので、朗唱されたものではないというブレアルの当時の説 (一九〇五年六月の『パリ評論』 *La revue de Paris* に載った) をアーンに示して慰めている。このブレアルの記事は翌年の『ホメーロスをよりよく知るために』(アシエツト社)のなかの一章に「文学史としての問題」(本誌に翻訳)として採録されている。

こうしたことからわかることは、ブルーストだけでなく当時の知識人は、ホメーロス作品を中等教育課程において原文で読まされていたことである。『教育の旅』によれば、当時のドイツのギムナジウムでは、ホメーロスの二作品のうち一方は数年かけて全編、もう一方は部分的に読まれているとあるが、フランスの主なリセ (例えばブルーストやアーンの通つたりせ・コ

ンドルセ)も、それと似た状況であったと思われる。言語学者ブレアルはこうした古典語教育を受けた若い文学者のなかで大きな影響力をもっていた。

一九〇八年六月のストロース夫人宛の手紙(p.140, op. cit. Tome 8, 1981)でブルーストは、スノップにすぎない人間がしばしばアカデミー会員になることを嘆き、こうした俗人より、ブトルー(Emile Boutroux 1845-1921 哲学者)、ベルクソン(Henri Bergson 1859-1941)、マスベロ(Gaston Maspéro 1846-1916 エジプト学者)、アルフレッド・クロワゼ(Alfred Croiset 1845-1923 弟は Maurice)。共にギリシヤ古典学者として有名)や言語学者ブレアルのほうがはるかにマシだと言っている。ブルーストが特に尊敬した学者に、美術史家エミール・マール(Emile Mâle 1862-1954)を加える事ができるが、こうした学者に対するブルーストの評価基準は、明らかに彼らが古典の深い教養をもっていることが必須の条件となっている。

アメリカ・イリノイ大学のコルプ教授編纂の『ブルースト書簡集』にはブレアルはしばしば登場するが、話題になっているのは全三十巻中、ブレアルがまだ生きていた第一巻(一八八〇—一八九五年)から第十巻(一九一〇—一九一一年)までで、ブルーストが『失われた時』にかかりきりになった頃からの手紙には彼についての言及は見あたらない。

『意味論試論』の最終章(二十六章)『言語・人類を教導するもの』には、「知の活動における言語の役割——印欧語優越性の所在」と副題がつけられている。ブレアルは、ドイツ語、英語、フランス語といった印欧語内での言語に優劣はないとしながら、アフリカの言語や中国語に対する印欧語の優越は意識している。彼はこうした長所は印欧語の始めから存在したのではなく、長い時間をかけて抽象化の機能を彫琢してきたことから生じたと考えるのである。この意味でブレアルの言語観は、理性的言語こそ抽象(内省・歴史)的思考の基礎であり支えるものだとするコンディヤック(Etienne de Condillac 1715-1780)の思想に近い。

こうした思想にたらなる彼の言語観は、しかし、時制のように重大なものを印欧語風には明確に言い表すことができないうなことは決してない。神話学から発した彼は、ある種の人種的偏見を根底にもつ当時の比較宗教学などからは距離をおいていた。彼の立場は、それぞれの言語が、使用する人間集団の精神構造を映したものだと考えたロマンチストのフンボルトとは異なり、むしろ理性的に磨かれてきた言語こそ人類を導くことができるかと考えるのである。彼の問題は当初から「起源」とその「進化」とに関わるものであり、言語の心理機能の問題ではない。『意味論試論』を言葉の現代的「意味」の問題だけを扱った著作と考えるのは間違いである。言語の内面的部分に

彼が注目したのは、その部分の比較言語学的解明によって起源（つまり人間という「神話」）の問題により強い光があたると考えたからである。『意味論試論』後尾に付け加えられた「動詞の起源」という驚くべき明晰な文章は、この書物の目的がまさに「起源（神話）問題」にほかならないことを示している。

ヴァレリーは、ブレアルが起源の問題を排除したと、次のような言葉で述べている。「ブレアル氏は、（言語有機体説を排除したと同じような理由で）起源という変転する問題を無視した。あらゆる問題において起源は幻想である」（Paul Valéry, p.1448 *Oeuvres Tome 2*, Ed. Pléiade Gallimard Paris 1960）。このヴァレリーの考えは、「起源の問題は言語学の埒外」という当時の言語学の自己規制の常識に沿っているものだが、この評にブレアルがどのような反応を示したのかはわからない。しかし『意味論試論』の大きな主題は結局、言語変化の心理的原因探求を方法論とした「起源問題」である。古い十九世紀をひきずる「起源問題」にヴァレリーはほとんど興味がないようで、関心を示しているのはひたすらこの本の心的、記号論的部分である。ブレアルの数ある関心事の中にはコンディヤック流の記号論的側面はたしかにあり、この側面は彼の弟子であるソシユールに引き継がれていくのだが、ブレアルの真のテーマは「言語」の理性的完成と並行して完成して行くと思われる人間性そのものにあった。ブレアルが後半生示した青少年の「教育問題」についての強い関心は、こうした脈絡でなくては理解できないだろう。

ユダヤ人にフランス市民権獲得を可能にした理念は「人間は生まれながらに自由であり、権利において平等である」という、「革命」のときの人権宣言第一条である。ユダヤ人に政治的権利を与え、奴隷制度を廃止させたグレゴワール神父 (Jean Gregoire 1750-1831 フランス国教会派) は、当時の危険に満ちた政治活動において、大革命、反革命、ナポレオン帝政、王政復古とめまぐしい軌跡を描いて展開したフランス史の激動期を、断頭台に登ることなく生き延びた希有な政治家である。彼はフランスのユダヤ人に大きな夢と希望とを与えたあと、パリ郊外（当時）のヌーイ (Neully) で天寿を全うした。彼の没後四十年、こうして市民権を得て豊かになった階層からブルーストが、このヌーイで誕生する。

七月革命の翌年、フランス在住のユダヤ人の恩人グレゴワール神父の国民的榮譽に包まれた葬儀で追悼演説をしたのは、彼のお蔭で得た公職で雄弁を発揮できるようになったユダヤ人の弁護士アドルフ・クレミュー (Adolphe Crémieux 1796-1880) である。国内だけではなく、中近東や当時フランス領北アフリカのユダヤ人解放に力をつくしたアドルフ・クレミューは、ブルーストの母方の大叔父にあたり、彼はブルーストが生まれる直前、国民防衛軍政府（一八七〇—一八七二）の法務大臣であった。彼の没年にはブルーストは九歳になっていた。こうしてユダヤ人はこれまで近づけなかつた領域において目覚ましい存在感を示すようになるが、ブルーストのこの大叔父はその典

型である。彼のパリの家で開かれていたサロンには当時第一級の文学者や政治家、音楽家、女優が集まり、彼はこのサロンの常連であったヴィクトル・ユゴーより先に第三共和政による国民葬の栄誉を受けた。

言語の力を裁きの場において發揮する職業である弁護士にたいし、言語の本質を解明するのが言語学者である。長い間、兵士として戦うことも、聖職者として祈ることも、農民として土地に働きかけることも許されなかったユダヤ人、商業・金融のような記号的経済活動に従事することは許されていたものの、記号の中の記号である言葉の力を公的に行使することを封じられてきたユダヤ人には、言語権力行使への抑えきれない欲求と、言葉の謎に対する満たされない好奇心とがあったはずだ。こうした若い知的ユダヤ人の欲求を満たす職業への接近を容易にしたのはグレゴワール神父であり、教育の分野で強い影響力を持っていたのがブレアルであった。十九世紀後半から現在に至るまで、フランスにかぎらず世界でユダヤ人のすぐれた言語学者が輩出している。

『失われた時を求めて』は言語学的面白さに満ちている。コンブレの司祭は地名の成り立ちにくわしく、ときにはその語源についての長広舌で周囲の人を辟易させるのである。小説に載せるにはあまりに専門的で無謀とも思える量のこの種の博識は、「ソドムとゴモラ」の巻、あるサロンでのプリシヨ

教授による地名の語源の開陳のなかに見られる。ブルーストはなぜあのように小説の本筋から語源の脇道に反れることがあったのだろうか。ケルト語学者のヴァンドリエス (Joseph Vendryes 1875-1960) によればこのプリシヨ教授のモデルは、プロシヤール Brocard という名の、いささかさえない古代哲学の教授である。ヴァンドリエスは『失われた時』における地名の語源探求の小説的意義を次のように説明している。「小説の中で語源探求に場所をあたえることによりブルーストの意図は、教養を鼻にかけている人たちの間にはびこっている奇癖を描写すること以外のものではなかったのではないか」(『マルセル・ブルーストと固有名詞』p. 122 Melanges Edmond Huguet Paris 1940)。この術学的知識の開陳は、実際当時の社交的知識人のアホらしさを映したものにすぎないのだろうか？

作者は個々の登場人物の話し方や用語に対してほとんどマニアックな興味を示している。出会いの初めは星雲 *nébuleuse* のように、定かには認識できない乙女たち *jeunes filles* のそれぞれが、次第に個別的輪郭をもち視覚的識別が可能になっていくなかで、『失われた時』の作者は言葉による区別も試みる。「乙女たち」の一人で、この巻の主人公であるアルベルチヌが、午後 *après-midi* という標準的な表現ではなく、田舎的表現である *antich* を用いるのは、彼女がパリではなく、フランスの古い地方の出であることを主張しているのではないか。冠詞

の女性形 *une* を [yn] ではなく、農婦のように *eun* [en] と古めかしく発音するゲルマント公爵夫人は、田舎の人間とのふれあいの多い古い貴族は、都会風ではなく農民と同じような話し方をする人を人に知らせるためではないのか。地方(南仏?) 出の小間使いセレストは、鳥のような不格好な髪をした主人公に向かって思わず、*Pauvre pounissou!* と南仏語らしき地方語を用いる(「ソドムとゴモラ」)。南仏語はフランス語の方言ではなく、中世において北仏語よりはるかに優れた立場にあったことを彼女たちは知らない。また、女中フランスワーズが *chercher, apporter, apporter d'eau* (水をとりに行く、もってくる) というひなびた言い方をし、主人階級のフランス語(*chercher, apporter de l'eau*) の「ブルジョワ的、教科書的」部分冠詞を無視するとき、こうすることで、「フランス」の本当の主人階級は、出自はともかくも教育のある新しい成金階級(*aristocrates*) ではなく、古い土地に根を張る自分たちなのだ、ということは無意識に確認しているのではないのか。ブルーストの属する階層がそのような古い「フランス」に属していないことは確かなのである。

フランスワーズの用いる庶民のフランス語は、バルベック・グランドホテルで万事を取り仕切るルーマニア出身の執事のしゃべる誤用に満ちたフランス語とは本質的に違っている。前者の用いる表現こそ、ブルーストの母方の「種族」がその成立に加わることでできなかった「古いフランス」の言語変化の過

程に見られる由緒ある表現なのである。

フランスの古い地名の成立にもブルーストの「種族」は関わりがなかった。こうしてみると『失われた時』はブルーストという外側の人間の追求した「フランス研究」なのではないか。アンドレ・ヴィアル *André Vial* の小論には、ブルーストの真の不安は自分の属する種族に関するものであったという見解が示されている (*Prus* 1971 *Nizer, Paris*)。

作者はまた、唯一の人に多数の名が対応しうることを知る。シャルリュス男爵は別名、ブラバン公爵、モンタルジ公、オレロン、カランシイ、ヴィアレツジオ、デュヌ大公でもある。また唯一の名が多数の形に分かれ、それぞれ違った実体に対応しうることも知る。St. Hilaire, St. Illiers, St. Héliers, St. Ylie といった聖人名あるいは地名がすべて *Sancus Hilarius* と同一の名から発して全国に散らばったり、教会手伝い女ユーラリ (*Eulalie*) の守護聖女 *Sanca Eulalia* がブルゴーニュ地方では、*St. Eloi* と男子聖人名になっていることを知って驚くのである(「スワン家の方へ」)。土地の固有性から必然的に生じたこの言語地理学的遺跡は語源研究に多くの知見をもたらした。スイス人ジュール・ジリエロン *Jules Gilléron* (1854-1926) の創始したこの土俗的固有の視点はブレアルの時間的普遍的観点とはまったく異なるものであるが、ユダヤ的普遍性よりむしろ、フランス的固有性(「スワン家の方」の二部「土地の名前」)に惹かれていた当時のブルーストは、ソルボンヌの語源学者の講義

を聴講していたことが知られている。

自分がどうしても同定することのできなかつたこの古いフランス人(ガリア人としての女中フランソワーズ、フランク族としてのゲルマント公爵夫人)の本質を彼は知りたかったのだ。ブルーストの小説の解釈にはソシユールやドゥルーズの記号的観点の外に、ブレアルの『意味論』の視点、また一つの原型がさまざまな形を取りうるという、ジリエロンの言語地理学的展望も必要であるように思える。言語学者の読むブルーストはあつてよいのだ。

ソシユール(一九五七—一九一三)の『講義』がジュネーヴの弟子によって編集出版されたのは師没後の一九一六年。また『失われた時』の最初の巻『スワン家の方』の出版はソシユールの没した一九一三年である。スイスは戦乱から免れていたが、『失われた時』の出版は戦争の影響を受け、二巻目の『花咲く乙女たち』(一九一九年のゴンクール賞)が出たのは戦争後一年経った一九一九年である。戦争のあいだにブルーストは刊行予定の原稿に膨大な量を書き加えた。『講義』の決定版の出版はブルーストの没年の一九二二年である。『失われた時』は完成していた。

ブレアルの功績のなかでおそらく最も恩寵にみちたものは、ソシユールの天才を見抜き、ユダヤ人でもない二十歳前半の若

者を一八八一年、パリの実践高等研究院(EPIHE)の自分の後任に据えたことである。当時のソシユールはライプチヒで出した『印欧語母音の原始体系』(一八七九)に関する比較言語学論文で一躍有名になったが、ドイツの比較文法学者にはこの業績を批判するものも多く、嫌気がさした彼は一八八〇年、ライプチヒからパリに移り、EPIHEでブレアルの比較文法の講義をうけることになった。『講義』に通じる記号論的観点は、具体的にその道筋を指摘することは難しいにしても、ライプチヒ時代の教えとは違う、ブレアルの社会的・心理的『意味論』の影響があることは間違いない。ソシユールは一八八一年に『サンスクリット語の属格の独立的用法について』で博士号をとり、ブレアルの後任者となった。

ブレアルはソシユールを印欧比較文法学者として認めたのであつて、『講義』で明らかになる記号論的側面を評価したのではない。ブレアルは二十歳をわずかに越えただけのソシユールの『印欧祖語母音体系』に示された比較文法学者としての力量を高く評価したのであつた。

ブレアルの、コレージュ・ド・フランスへの推挽にもかかわらず、ソシユールがスイスに去つたのは、古いプロテスタント貴族であり代々学者の家柄のソシユールが、国籍をフランスに移す決心がつかなかったからだと言われているが、真相はおそらくそうしたものではないのではないか。ここはその真相を追究する場ではないが、一つだけ言えることは、ソ

シュールが去ったのちブレアルの後を襲ったメイエ (Antoine Meillet 1866-1936) が、基本的にはブレアルの比較文法分野を守り発展させたのに対し、ジュネーヴに去ったソシュールは比較文法から遠ざかり、ラングとパロール、通時性と共時性、システム、音韻論、また言語記号の恣意性といった、現代の文学理論の根幹をなす言語概念の規定の試みに移っていったことである。現代の構造主義、セミオロジ、認知論と言った学問はソシュールの新しい分野から発したとも言えるが、若いソシュールはフランスのブレアルに受け入れられてはじめてこうした方向に滑って行くことができ、その方向を現代につながるようになった。

言語学者ブレアルの持っていた二つの方向性、つまり古典学を基盤にした比較文法と文学は、天才ソシュールによって、より豊穡なものを生み出すいくつかの方法論に細分化されたが、

現代はその細分化された「専門」が必ずしも人文学を総合的に豊かにする装置ではなくなっているように見える。これはブレアルが体現していた総合的学問のなかの記号学分野が異常な発展をとげた一方で、古くからの文献学、古典語学がないがしろにされ始めたからではないだろうか。

文学者ブルーストにはすぐれた言語学者のセンスがあり、その文章は言語学的探索に十分耐えられる質のものである。また言語学者バンヴェニストやヤコブソンの論は、その文学性こそ彼らの言語論を説得力のあるものにしていく。ドゥルーズやバルト、ジュネットの文学論は双方のエレガンスを備えている。ブレアルの仕事にはこうした文法と文学との好ましい原初的融合があった。

(二〇〇八年十二月三日 フランス・サンテチエンヌにて)